運び出された紙型

大震災の日、鈴木は所用で木更津に出かけて留守だった。地震直後に発生した火災は神田橋近くにあった店舗および家財道具一切を焼き払うが、常々鈴木から家の中で一番大事なものは紙型だということを聞いていた夫人ときは、咄嗟に二人の小僧に命じて積めるだけの紙型を箱車に入れて運び出させると、五歳になる娘を背負い、八ヶ月の身重の体で錦町河岸から一ツ橋方面へ避難、竹橋を渡ると宮城の堀端に誘導されて粗末な小屋の中で他の避難者とともに三日間を過ごしたのち、宮城を出て新宿まで歩いた。新宿からは親切な人に出会って荷車に乗せてもらい調布の親戚宅に身を寄せることができた。

数日後、千葉の木更津から歩いてきた鈴木が調布でときと再会、紙型を無事に運び出したことを聞くと泣いて喜んだ。活版印刷が主流であった当時、紙型は出版業者にとって生命ともいうべきものであった（→余滴⑤）。

営業活動を再開する

鈴木は、「東京市芝区白金三光町五百四拾参番地」の義姉宅に移って営業活動を再開した。運び出された紙型をもとに、早いものでは『受験英語には斯の如き単語を暗記せよ』が震災から一ヶ月後の十月五日

奥付で発行され、続いて『受験準備　最も要領を得たる外国地理』が震災二ヶ月後の十一月一日奥付で発行された。大正十三年八月十五日初版奥付の大島隆吉著『試験によく出る 英文和訳正しき訳し方』は、著者の序言に「四十版の印刷の最中彼の九月一日の大震災の為め訂正増補の原稿も紙型も悉く焼失の厄に会い全く絶版の悲境に陥った。」とあるように、新たに改訂新版として大阪市北区堂島の印刷所で組み直されて震災から一年後に発行された。増刷されると、その奥付広告を見た全国の学生や書店から注文が殺到した。文字通り羽が生えたように売れたという当時の様子を、後年、ときは次のように述懐している。

製本ができると、そこからどんどん、どんどん……。お父さんが焼け石に水とは、このことだって。それでわずか五点か七点の本が、毎日、郵便だけでも大変なのよ。で、お母さんが毎日その本の奥付—昔は奥付は判がなきゃいけないでしょう。それが足りないで、検印紙をみんな判押して、著者がよこしたわけ。それを毎日、毎日奥付に……。夜になるとお父さんが帰って来て、封筒の表紙を書いて、それをあくる日お母さんが荷造りして、朝出がけお父さんが郵便局へ持って行って、そのうちにやいやいって注文と催促でしょう。それでもう毎晩、一時、二時になるのがふつうだったのよ。（「夫、一平の思い出」『回想 鈴木一平』）

鈴木は一年間で約三十万円（現在の十二億円）の利益を得ることができた。かけ蕎麦一杯が十銭、小学校教員の初任給が五十五円といわれた時代である。

その後の大修館書店の事業発展の礎を築いたのは、まさしくときの咄嗟の機転によって運び出された紙型と、一平とときの昼夜を問わぬ働きによるものであった。